

## ヴォルテール『哲学書簡』の今日的意味

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-07-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大嶋, 仁 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00008870">https://doi.org/10.14945/00008870</a>

## ヴォルテール 『哲学書簡』の今日的意義

大 嶋 仁

今日は国際化時代だと言われ、また価値の多様化の時代だとも言われているが、こうした時代を生きてゆく上で、我々ほどのような思想を、あるいは知的態度を持つべきであろうか。自己の立場を頑固に絶対化したところで得るところは無さそうである。一定のイデオロギイに固執したり、一定の社会的価値基準に全面的に寄り掛かっているのも駄目な様である。今から一世紀以上も前、江戸の日本から東京の日本への激動期に、福澤諭吉は次の様に言った。

試に見よ、方今我國の洋學者流、其前年は悉皆漢書生ならざるはなし、悉皆神佛者ならざるはなし。封建の士族に非ざれば封建の民なり。恰も一身にして二生を経るが如く一人にして兩身あるが如し。二生相比し、兩身相較し、其前生前身に得たるものを以て之を今生今身に得たる西洋の文明に照らして、其形影の互に反射するを見ば果して何の觀を為す可きや。其議論必ず確實ならざるを得ざるなり。<sup>1)</sup> (傍点引用者)

このように、我々にとっての国際化と価値の多様化の幕開けにおいて、福澤は既に「二生相比し、兩身相較」すること

を説き、それによって我々の置かれた難局を打破することを教えているわけだが、そうした自己の内なる諸価値の比較が出来るには、そうした諸価値を離れた第三の自己がなくてはなるまい。福澤は自らの「一身二生」を客観的に見れた人であった。

今から二百五十年も前、ヨーロッパにもそうした自らの「一身二生」を客観視出来る人がいた。ヴォルテールがその人であるが、彼は当時「野蛮な島国」として片づけられていたイギリスに渡り、その文化、民族といったものに接し、自らもそれを生きることによって、より広い視野に立って祖国フランスを論じ、物の見方、考え方の歴史を一歩進めたのであった。

彼が活躍した時代とは、旧体制が崩れかかり、既存の価値体系が様々な局面で揺らぎはじめていた時代であった。そうした時代に早々と異文化の体制、価値体系に接してしまったことは、彼にとって、自国の体制や価値体系に対する相対化を一更早める機会となったであろう。英国から戻って書いた『哲学書簡』<sup>②</sup>は、そうした相対化の努力の結晶であり、その効果は来たるべき大革命の到来を促したのであった。

だが、我々にとって『哲学書簡』が大革命の前ぶれであったということが重要なのではない。英仏両文化（我々にとつては同じ西欧文化であっても、英仏両国人にとって、しかも十八世紀前半の両国人にとっては極めて異質な英仏両文化）に股がって、作者が真に「一身二生」を体現しつつ、一方に偏ることもなく、現に置かれた自国とその民の将来のために異文化を紹介し、自国文化を相対化したことの方が重要なのである。つまり『哲学書簡』の著者ヴォルテールとは、あらゆる価値の多様化にも対応すべく、「一身にして二生」の我が身をも客観視し得た一つの人格であり、『哲学書簡』とは、そうした人格の所産であると同時に、そうした人格をよく語ってくれる書物だということが重要なのである。

『哲学書簡』とは、別名『英国書簡』<sup>(3)</sup>とも言われるように、ヴォルテールの「英国事情」である。福澤の『西洋事情』<sup>(4)</sup>が新日本建設に大いに寄与したとするなら、この「英国事情」は旧フランス破壊に大いに貢献したと言えるであろう。不当に祖国フランスを追われてドーバー海峡を渡った若き詩人が、渡った島国のあり様を祖国の人々に語る。その報告には驚くべき新知識が積まれている。しかし、その積荷の奥は更に驚くべきで、祖国の制度への激しい嘲笑が隠されていたのだ。福澤の『西洋事情』が時の政治に踏みつぶされぬよう筆を押えて書かれているのに対し、この『英国書簡』には反逆精神が丸出しにされている。この書物は秘かに出版され、見つかつて焼かれ、それでもフランスの知性に光を与え、やがては国を変えたのであった。

『哲学書簡』の内容は多岐にわたっているが、主なものは宗教、哲学、文芸についての論である。ヴォルテールは英国宗教の実情を変形させて語り、フランス旧教の迷妄に批判と嘲笑を浴びせ、また英国思想の大陸思想に欠ける優秀性を紹介しては、祖国の民の偏見を取り除こうとしているのである。また詩や演劇を無類に愛した彼は、英国文芸の知られざる美を讃え、文学上の絶対主義を打破しようとしたのであった。しかし、何と言っても『哲学書簡』の主旨を最も明確に語るのは、最終章の反パスカル論であり、ここで彼は、パスカルの『パンセ』をフランス的偏見の根源とみなして弾劾するのである。このパスカル批判が的を得ているかどうかは別として、ヴォルテールがフランス的偏見を打ち破るために、『哲学書簡』という「英国事情」を書いたということは、これに明らかである。

だが、そうだからといって、『哲学書簡』を単なる体制批判の書と考えるのは、ヴォルテールを知らない人のすることであろう。

だが、諸君に繰り返して言おう。私は好き勝手に書いてあるのであって、私の言うどんな意見も、それが確かだと保証は出来ないのである。私はいっさいの責任を放棄する。私の理屈は私の夢であり、そうした夢の中には自分でも気に入っているものがあるのは本<sup>⑧</sup>当だ。だが、私がどんなに気に入った夢だ<sup>⑨</sup>って、今すぐにも捨て去る覚悟があるのだ。そうすることが宗<sup>⑩</sup>教と祖<sup>⑪</sup>国の役に立つのなら。<sup>⑫</sup>（傍点引用者）

これがヴォルテールの著述の基本的態度であつた。従つて我々は、彼の言葉尻にとらわれてはならないのである。反体制の言辞と同量の体制擁護の言辞を同一の書物の内に見出すことも不可能ではないのだ。彼の思想は矛盾の塊であろうか。『哲学書簡』を読む人は、様々な矛盾と映る言辞の裏に、恐らく一貫する一つの人格を見るであろう。その一つの人格の織りなす思想の運動、それこそが『哲学書簡』である。そしてその目ざす所はいつも「宗教と祖国」であるということも、素直に読めばわかることである。

ヴォルテールという「一身二生」にして一つの人格、この人格が織りなす思想の運動とは、それでは一体どんなものだろうか。

その運動の出发点は、何と言つても知的好奇心であろう。『哲学書簡』第一章「クエーカー教徒について」の冒頭、すなわち全篇の冒頭で、彼は次のように言っているのだ。

こんなに風変りな民族というものがあるのなら、彼らの宗教や歴史について知りたがる心を抱くのは、およそ物を考えるほどの人ならば、当然してよいことであろう。<sup>⑬</sup>（傍点引用者）

ヴォルテールは、「知りたがる心 (la curiosité)」は、「およそ物を考えるほどの人 (un homme raisonnable)」なら当然抱くべきものだ、と考えていたのである。これは、考えようによっては、知的好奇心がなければ、物はまともに考えられない、ということにもなる。すなわち、知的好奇心こそは思考の母だ、というのである。

どんな運動の出発点にも、エネルギーが充満し、その爆発が必要となるけれど、そのエネルギーとは、ヴォルテールの場合、狂信に対する嫌悪だと言ってよい。フランス旧教は勿論、その批判のために持ち出している英国人の宗教でさえも、それが狂信になれば徹底的に排除されているのだ。フランス旧教に比べれば、はるかに健全と思える「クエーカー教徒」にしても、それが聖書を引き合いに出して自己を正当化する段になると、ヴォルテールは承服しかねるのである。彼は、読者であるフランス旧教徒を意識して、敢えて「クエーカー教徒」を非難はしない。ただ、次のように言うだけである。

私は反論しないよう心がけた。狂信者を相手に得るところはないからである。

ヴォルテールの思想の運動の目ざすところが「宗教と祖国」であるということは既に述べたが、『哲学書簡』が「祖国」の偏見打破の為に書かれたことはわかるにしても、一体どんな「宗教」のために、彼は書いたのであろうか。反パスカルの彼は、必らずしも反キリストではなく、そうした彼の隠れた宗教心は、たとえば「クエーカー教徒」の口を借りて、次のような形で現われてくるようである。

私たちクエーカー教徒は、決して戦争になんか行きません。別に死ぬのがこわいからではない。死とは、私たち全てを唯一の存在者に結びつける貴い瞬間です。それをたたえなくて何でしょう。私たちが戦争に行かないのは、死が恐ろ

しいからではない。そうではなくて、私たちが狼でも、虎でも、ブルドックでもないからなのです。私たちは人間でしょう？ キリスト教徒でしょう？<sup>(10)</sup>

こうした彼の「宗教」が、彼の思想の運動の行きつくはずの所だとしても、それが狂信に陥らぬようにするには、言いかえれば彼の思想の運動の軌道修正をするには、何が必要だろうか。英国の宗教事情の仏国のそれと著しく異なるのを見、英国には様々な宗派が異端として片づけられずに尊重されている美点を見出し、しかもヴォルテールは次のように言う。

英国にもし宗派が一つしかなかったとしたら、とんでもない独裁国家となっていたらう。宗派が二つだったとしても、互いの咽を傷つけ合うのが落ちだったらう。だが宗派が三十もあれば、これはもう平和共存しかあり得ないのだ。<sup>(11)</sup>

何とも醒めた評価の仕方ではないだろうか。ヨーロッパの少女が教理問答をたたき込まれるのも、アジアの少女が男を楽しませる芸を教え込まれるのも、共に母親の子に対する愛情と利害心のあらわれなのだ、<sup>(12)</sup>と云ってしまえるヴォルテール。彼はまことに醒めた冗談の言える人であった。この醒めた冗談あってこそ、彼の「宗教」は狂信から救われ、思想の運動は軌道を誤まることなく、またその自由を失わないのである。

それでは、こうしたヴォルテールの思想の運動、というより躍動は、どのようにして今日的意義を持ち得るのだろうか。国際化、価値の多様化という問題をかかえる我々は、もう少し『哲学書簡』に立ち入って、問題解決の端緒をつかみたいと思う。

先程引用した『哲学書簡』の冒頭、これをもう一度読んでみたい。

こんなに風変りな民族というものがあるのなら、彼らの宗教や歴史について知りたがる心を抱くのは、およそ物を考えるほどの人ならば、当然してよいことであろう。

ここで、今度は「風変りな民族 (un peuple extraordinaire)」という語に注目してみよう。つまり知的好奇心の対象に「風変りな民族」を選んでいることが大事なのである。そこには、まず「民族」という異質な集団の意識がある。しかもその「民族」は「風変りな」と形容され、それによって、外からその「民族」を眺める者の偏見が浮き彫りにされる。この偏見は好奇心をかき立てるためには有効だが、やがては克服されるべきものとしてある。どのように克服されてゆくかという点、その「風変りな民族」の「宗教や歴史」を知ることによってである。つまり、単なる好奇心を知的好奇心に転ずることによってである。こうして偏見は消えてゆく。はじめ異常と見えていたものが正常と見えてくるにつれ、自ら正常と認めてきた何かが異常に感じられてくる。そこで何が正常で何が異常かについて、省察する必要があるのである。これがヴォルテールの知的運動である。それは、モンテーニュ以来レヴィ・ストロースにいたるまで、フランスの知を貫く運動でもある。

次に引用文で注目すべきは、「宗教 (doctrine)」及び「歴史 (histoire)」という語であろう。ヴォルテールは、一民族を理解し、よって自らをも知ろうとするには、その民族の「宗教」と「歴史」を知るべきだ、と言うのである。ここで「宗教」とは今日で言う価値観だと言ってよいだろう。まず一民族の価値観を探り、そうした価値観のよって来たる所以を時をさかのぼって見ることが肝心だと言うのである。この方法は、今日の我々にとっても、極めて正当な方法なのでは



ないだろうか。ただ平面的な比較論を展開するのではなく、歴史研究を怠らぬことによって、立体的で動的な視点を得、そこに国際化時代、価値多様化の中に生きる自分を見出すことこそ我々の急務なのだとするならば。

一 民族の根本の考え方、それは価値観とも「宗教」とも呼べると思うが、それが批判され、整えられたものが哲学であろう。そうした哲学を比較し、しかもその相違点の背後に時代と文化というものを見るとき、最も有効な比較論が、実は『哲学書簡』第十四章に見つかる。この比較論が単なる静的なものではなく、比較の対象をそれぞれの場所と時とに位置づけたあとで、両者を結びつけて流れる一つの歴史というものに眼を向けさせている点が見事なのであるが、比較の対象とはデカルトとニュートンである。

この仏英を代表する天才の比較は、その着想だけでも充分に今日の我々の興味を惹くと思われるが、ヴォルテールの比較方法について知っておくことは、より有益であろう。

まずヴォルテールは、単純な比較の作業が、この二天才を相手に困難であることを告げる。

実際、デカルトとニュートンとは、余りにもちがう二人であったことを認めねばなるまい。それぞれの哲学ばかりではない。境遇においても、普段の行いにおいても、全く異なった二人であった。<sup>(15)</sup>

余りにも異なった二人は比べられない、ということを行っているわけのだが、それでも単純に科学上の業績の比較、しかも当時の偏った見地からの比較をしようという人に対しては、次のように言っている。

デカルトの哲学をニュートンの哲学に比するなど、人は敢えてすまい。一方は練習作にすぎず、他方は一大傑作なのだから。<sup>(16)</sup>

ここでヴォルテールが言いたいのは、「練習作」は「一大傑作」に劣るなどというのは愚であって、「練習作」なくして「一大傑作」は生まれ得ないと考えるべきなのだということである。言いかえれば、優劣判断を下すための比較などはない方がよく、そうした比較は、むしろ偏見のお先棒をかつぐようなものだ、ということなのだ。

英国では、我が同胞フォントネル氏が科学アカデミーで行なったニュートン礼讃の演説を英訳しては熟読している。英国人は、この演説が英哲学の大陸哲学に対する圧勝の証しであろうと思いつこんでいたのだ。ところがいざ読んでみると、そこにはニュートンをデカルトに比べているくだけりがある。彼等の憤慨は大変なものであった。<sup>(17)</sup>

仮にもデカルトがニュートンと対等に比較されようものなら、英国人はそれを許さぬほどの盲目的愛国主義者だったというわけである。英国はヴォルテールにとって「自由の国」であったはずだが、それは宗教上のことで、別の面では狂信的な、排他的感情の支配する「不自由の国」でもあったろう。

フォントネル氏の比較論を非難する英国の学者連の中には、デカルトには大して幾何というものが解っていないなどと言いつける者までいる。こうなると、育ての親を殴りつけるに等しい行為である。<sup>(18)</sup>

一つの価値観に寄り掛かって眠らず、いつも醒めた眼で世界のあちこちを見つめていたヴォルテール、彼はこの地球上のどの国にも「自由」などないことを知りつつ、「自由」を求めた人であった。彼の「自由」とは、彼の思想の目まぐるしいばかりの運動であり、その運動の成果が「デカルトとニュートンについて」という比較論のだが、比べにくい二人を前に、彼はどうしたのでらうか。

彼はまず、デカルトの人となりを語る。

デカルトは生まれながらに生き生きと活発な想像力に恵まれた人で、それだけに考え方も生き方も独自のものがあつた。<sup>(19)</sup>

デカルトは、ある時軍隊にも入ってみたことがあるような人で、そういう人だからこそ、哲学に専心するようになってからも、女と寝ることが哲学者にあるまじきことだなどは考えなかったに違いない。彼と愛人との間には、フランシーヌという女の児が生まれ、この児が余りにも早くこの世を去った時のデカルトの涙は、止めどもないのであつたのだ。こういう風だから、この哲学者は、人間のすることは何でも身を以て知っていたのだ。<sup>(20)</sup>

こうして描かれた人間デカルトが、今度はその生まれた国と時代とに位置づけられる。

この人はまた、自由に物事を考え、哲学を深めるには、人々から逃れること、特に祖国を離れることが必要だ、と考へつづけていたのだ。<sup>(21)</sup>

当時の人々には、彼の考えを理解できるほどの知性もなく、出来ることと言えば、彼を邪魔することだけだったのである。<sup>(22)</sup>

真理を求めてフランスを去ったデカルト。：しかし彼はオランダの大学により多くの理性を見出したわけではない。：フランスでは彼の哲理の最も真実な部分が真向うから否定されていたその時に、オランダの自称哲学者達は彼を迫害したからである。：そうして、あれほど神の存在の新しい証明法のために知力の全てを尽した彼が、神の存在など頭から認めぬ者であるかのように疑われたのであった。<sup>(23)</sup>

それは、あの偉大なガリレイが八十の老人であったというのに、異端審問の牢獄の中で呻吟していたのと時を同じうする。地球は回ると言ったがために……<sup>(24)</sup>

デカルトはストックホルムで死んだ。早死にであったと言うべきだろう。養生をよくしなかったせいか、悪い政治体制のせいか、それはともかくとして、彼は、自分を敵視する学者や、自分を嫌っていた医師に看とられながら、この世を去ったのである。<sup>(25)</sup>

引用が長くなったが、これでヴォルテールが、まず人間として描いたデカルトという人物を、時と場所との中に見事に位置づけているのがよくわかる。デカルトはヴォルテールの手の内で裸にされ、次にまたヴォルテールの手で時代と国土

との衣裳を着せられたのだ。こうすれば、文化と歴史との交差する地点に、一人の男としてのデカルトが両脚を立てることが出来るのである。

こうしてデカルト像を描きあげたヴォルテールは、今度はニュートンの素描を始める。

一方のニュートンは、また何と平安で幸福な人生をおくったことだろう。彼は国民の尊敬を一身に享け、八十五歳まで生きたのだ。運が好いと言うほかあるまい。デカルトとちがって自由な国に生まれ、しかもそれは、もはやスコラ哲学の横暴もすたれ、理性以外耕やされるものもなかった時代だったのだ。<sup>(28)</sup>

ここでヴォルテールは明らかに比較をしている。デカルトの生きた国と時代を、ニュートンのそれに比べているのである。デカルトが自由を得られず欧州じゅうを遍歴して果てたとすれば、ニュートンは「自由な国に生まれ」、「国民の尊敬を一身に享け」て死んだという違い。また、デカルトが「異端審問」が理性を苦しめていた時代の人であったのに対し、ニュートンは「スコラ哲学の横暴もすたれ」た時代の人であったという違い。こうした場所と時との違いが浮き彫りにされているのである。

それでは二人の人となり、人間としての二人の違いを、ヴォルテールはどうみているか。

ニュートンがデカルトと特にちがう一点を挙げるとすれば、それは、あれほどの長い生涯の内、一度として情念や衝動に身を任せるようなことが、ニュートンにはなかったということである。つまり、一度も女と接したことがないのだ。それは、彼を看とった医師が、私に直かに語ってくれたことである。このことからニュートンの偉大をたたえるこ

とは宜しい。だが、そうだからといって、我々はデカルトを責めるようなことがあつてはなるまい。<sup>(27)</sup>

ニュートンの人となりに対し、ヴォルテールはその女性關係にしか言及していない。これは、ヴォルテールが人間を知るにはその人の異性關係のあり様を見るのがよい、と考えていたからであろうか。彼は決してフロイト的な考えをしてい  
たわけではなかったろうが、時代や国土の衣を脱がせて裸の人間を見ようとすれば、古今東西どこでも人間が個人として  
行うこと、人間の生物としての機能、本能に根ざした行為、といったものに眼を向けねばならなかっただろう。そうした  
見地から、恐らくはニュートンの性生活がデカルトのそれに比されているわけだが、この比較の作業の根底には、寛容と  
しか呼べぬ心があらわれている。「ニュートンの偉大をたたえることは宜しい。だが、そうだからといって、我々はデカ  
ルトを責めるようなことがあつてはなるまい。」この寛容は、狂信に対する嫌悪の情を超えて、「クエーカー教徒」の口を  
借りて出た非戦論と同じく、宗教的感情に発していると言えそうだ。

こうして見てくると、ヴォルテールの比較論は、つねに寛容な精神のもとに、比較の対象を出来る限り公平に眺めよう  
と、比較対象の自然、文化、歴史に光を当てているように思われる。彼は、言ってみれば、まずデカルトとニュートンの  
肌に触れようとしているのだ。次には二人の歩んだ別々の道を、自分でも歩んでみる。そして、それぞれが吸った時代の  
空気も吸ってみるのである。こうしたことが出来るには、「海を越えただけで、物の根底についての見方がまるで違<sup>(28)</sup>う」  
と実感していなければならぬのは勿論である。その意味で彼の英国体験は、この比較論の決定的な必要条件である。し  
かしそれだけではあるまい。あらゆる狂信、あらゆる社会制度の押しつけ、といったものに対するあれほどの反感と、全  
てを許そうとする優しい心というものが、生まれたときからのヴォルテールを貫いていなかったなら、これほど均衡のと  
れた比較は出来なかつたはずである。

ところで、この比較論は、前にも述べたように、静的な対比に終始しているわけではない。一度、二つの対象がその位置を確定されたならば、今度は、一つの総合的な時の流れの中に、それら二つが結び合わされ、組み込まれていくのである。この静から動への展開あるいは転換、対比論から歴史への移行、これをヴォルテールは次のように示す。

本当のところ、デカルトの学問をニュートンのそれと比べようなどと思う人はいないだろう。デカルトのは練習作、ニュートンのは一大傑作だからである。しかし、真理の道に我々を導き入れた者は、その後、その道を窮めた者に劣らないかも知れない。

デカルトは盲人に光を与えた。人々はこうして古えの道の誤まりと、自らの誤まりとに気づいたので。彼の開いた道は、彼以降、とてつもなく広いものになってしまった。(中略) 深淵はのぞかれた。デカルトはそこに立ち、無限の道のをぞき込む。今やニュートンがそれを掘り下げるのを見る時だ。

我々はヴォルテール著『哲学書簡』に今日的意義を見出すべく、その第十四章「デカルトとニュートンについて」を見つけた。この章ばかりが、しかし、我々にとって有益なものでは勿論ない。全篇が「英国事情」であり、従って外国事情の書であるということからして、そこには今日の我々に直結する、外国文化の輸入、翻訳といった問題が含まれているからである。ここで翻訳というのは、文化全体の解釈と伝達ということであるが、『哲学書簡』第十八章「悲劇について」<sup>(30)</sup>においては、文字通り一国の文芸の他国への翻訳といった問題も出て来る。ヴォルテールがそこで展開する翻訳論は、我々の注目に値しよう。それは、単に文芸上の翻訳というよりも、文化上の翻訳という、より大きな問題を含んでいるから

である。

ヴォルテールの翻訳論は、彼の次の数語に要約され得る。彼は、シェイクスピアの『ハムレット』の有名な独白を翻訳するに当り、こう述べている。

ここで私が一語一句正確に英語を訳しているのだなどは、夢にも思つては下さるな。言葉尻にとらわれた翻訳者に禍あれ、彼らは一語一句を訳しては、全体の意味をぶちこわしているのだ。だからこそ言おう。文字は殺し、精神は生かすのだ。<sup>(1)</sup>

「文字は殺し、精神は生かす」これがヴォルテールの翻訳論、あるいは翻訳の決意だと言えるのだが、それにしても彼の翻訳を読む者は、彼が余りにも「文字」を無視したために、「精神」までも変形させてしまつてゐるという感を免れない。ところが「To be or not to be, that is the question」が「Demeure, il faut choisir, et passer à l'instant de la vie à la mort, ou de l'être au néant」<sup>(2)</sup>となつてゐるからである。つまり、「生きるか死ぬか、それが問題だ」という二者択一を前にしたハムレットの悩みが、「待てよ、よく考えなくては。考えた上で、あとは一気に、飛び越さなくては。生から死へ、存在から無の中へ」という死への渴望へと転じてゐるからである。

こうした思い切つた転換は、とんでもない誤訳、とんでもない翻案という非難を免れ得ないであろう。特に翻訳技術の進んだと自負してゐる今日の我々にとっては、思いもよらぬ悪訳だと言わざるを得ない。しかし、幾つもの座標軸が交錯する今日を生きる者は、少なくとも一つは、このヴォルテール式翻訳に学ぶものを見出すことが出来るのである。それは座標変換とも呼ぶべきもので、英仏の文化の座標軸を定めた上で、一方の座標群を他方のそれへと変換しようとした結



果が、先のハムレット独白の翻訳となっているのだ、と見ることも出来るからである。英仏文化と歴史に通じていたヴォルテールが、それぞれの座標軸を定めた上で、ハムレットの独白を英文化の座標面に定め、それを座標変換によって、仏文化の座標面に移しかえたのである。

こうした座標変換による翻訳は、座標軸の設定の段階で幾つもの困難に出会うにしても、ともすれば我々が海外の文物を翻訳する場合に陥りがちな欠点、すなわち文物あるいは文字そのものにとらわれて、全体の構造をよくつかまないといい欠点に対しては、優位に立っていると言い得るのである。

幕末以来今日まで我々の翻訳文化の歴史は一世紀以上を経ている。その間におこなわれた翻訳は、文字を媒体とするものだけでも莫大な量にのぼる。しかし、それら幾多の翻訳のうち、どれほどが座標変換の方法を用いているであろうか。我々は余りにも文物にとらわれ、構造的連関を無視してきたのではあるまいか。構造的連関をとらえることは、ヴォルテール以来レヴィ・ストロースにいたるまでフランス人の特技かも知れぬが、そのレヴィ・ストロースなら、我々の翻訳の論理を「つぎはぎ仕事 (bricolage)」と理解ある態度で呼ぶかも知れない。それは確かに西欧が失った何かであるのかも知れないが、西欧化という翻訳の時代に、我々はもはや「つぎはぎ仕事」ではやってゆけないであろう。

ヴォルテール流の座標変換による翻訳とは、結局、比較文化論を基にした翻訳ということになるが、座標変換によって得られた新しい座標群こそは、旧くからの座標群に活を与え、文化の歩みを進めてゆく原動力となるであろう。昭和十四年柳田國男は「翻訳は比較」であり、「二つの国語」の比較を通じて「国語」を新しく「創り出す」ことだと言っているが、このような見方こそはヴォルテールの『哲学書簡』の精神を受け継ぐものであろう。柳田自身は、来たるべき座標変換のために、己れの文化の座標軸を探りつつつけていたようである。

〔注〕

- (1) 福澤諭吉『文明論之概略』緒言、岩波版『福澤諭吉全集』第四卷(昭三四)五頁。
- (2) “Lettres Philosophiques ou Lettres Anglaises avec le texte complet des remarques sur les Pensées de Pascal” 一七三四年に発刊されたが、本論文では“Lettres Philosophiques” Voltaire Bibliothèque de la Pléiade “Voltaire” Texte établi et annoté par Jacques Van Den Heuvel 1961, Librairie Gallimard から引用し、拙訳を付した。
- (3) Lettres Anglaises と呼ばれる。注(2)参照。
- (4) 福澤諭吉『西洋事情』慶応二年刊、岩波版全集第一巻に収録されている。
- (5) 第十五章(第二十五番目の書簡)「パスカル氏のパンセタビツ」“Sur Les Pensées de M. Pascal”。
- (6) 『哲学書簡』第一附録「靈魂のつじつ」Appendice Premier ; Lettre sur l’Ame, Lettre sur M. Locke (p. 43)。引用文献については注(2)参照、四三頁。
- (7) “Sur les Quakers” (p. 2) 二頁。
- (8) 注(7)参照、同頁。
- (9) 同書、三頁。
- (10) 同書、四頁。
- (11) 同書、一八頁。
- (12) 同書、第十一章(第十一番目の書簡)二九頁。
- (13) 注(8)参照。
- (14) モンテーニュ「エッセー」一巻第三章「人食い人種について」は、いわゆる「よい野蛮人 (bon sauvage)」について語り、またデカルトの「方法序説」第二部では、ヨーロッパ人、シナ人、人喰い人種について言及し、ともに偏見を超えようとしている。レヴィ・ストロースは社会人類学の立場から、そうした偏見を打破しようとした。『野生の思考』、『今日のトーマティズム』、『人種と歴史』など参照。
- (15) “Sur Descartes et Newton” (p. 55) 『哲学書簡』注(2)に述べた書の五五頁。

- (16) 同書、五八頁。
- (17) 同書、五五頁。
- (18) 同書、五七頁。
- (19) 同書、五五頁。
- (20) 同書、五五頁。
- (21) 同書、五五頁。
- (22) 同書、五五頁。
- (23) 同書、五五、五六頁。
- (24) 同書、五六頁。
- (25) 同書、五六頁。
- (26) 同書、五六頁。
- (27) 同書、五六頁。
- (28) 同書、五四頁。
- (29) 同書、五八頁。
- (30) Sur la Tragedie. 同書、八一頁。
- (31) 同書、八三頁。
- (32) 同書、八二頁。
- (33) Lévi-Strauss "La Pensée Sauvage" Plon, 1962 (p. 26).
- (34) 柳田國男『翻譯は比較』筑摩書房版『定本 柳田國男集』第三一巻、三五三頁(昭和三九年刊)。

※ 上記の文献のほか、ヴォルテール『哲学書簡』に關しては次の書物を参照した。Theodore Besterman "Voltaire" Longmans 1969, André Maurois "Voltaire" Appleton 1932, Raymond Naves "Voltaire: l'Homme et l'Oeuvre" Hatier-Boivin, 1958 及び世界の名著三五『ヴォルテール、マイドロ、ダランベール』(中央公論社 昭和五五年)。